

熟練CIRCLEアルバイト

グラ～暴食～

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

君達は知っているだろうか？いつも月島まりなの横で楽曲を売っている彼女を。知っているだろうか？365日休まず楽曲を売り続けている彼女を。この物語は、そんな彼女をオリキャラとして確立させ、熟練CIRCLEARバイターとしての日常を描いた物語である。

目次

第1話 CIRCLEARライター

1

## 第1話 CIRCLEアルバイター

君達は知っているだろうか？いつも月島まりなの横で楽曲を売っている彼女を。知っているだろうか？365日休まず楽曲を売り続けている彼女を。この物語は、そんな彼女をオリキャラとして確立させ、熟練CIRCLEアルバイターとしての日常を描いた物語である。

彼女の名前は小暮 舞。この音楽スタジオ『CIRCLE』で創立当初から働いている。彼女の仕事は、主に雑用。音楽知識はあまりないのでそちらはオーナーである月島まりなに一任されている。なので細かく言えば、機材を運んだり、清掃したり、受付をしたりなど、何も特別なことはしていない本当にしがないアルバイター。

「こんにちは〜！」

さて、今日もここで練習するお客さんが来たようだ。

第1話 CIRCLEアルバイター

CIRCLEにはこんな噂がある。  
曰く、喋らない受付の店員がいる。

曰く、こちらが何と言う前に望むことをしてくれる。  
曰く、その人は心が読めるらしい。 e t c . . .

こんな噂が流れている。その人とは. . .

(今日はちょうどいい天気ね。まりなでも誘ってお花見してお酒を飲みたいなく。)

割となんの変哲も無い、唯の一般人である。少し違うところがある  
とすれば、こいつは本当に喋らない。そして表情筋が死んでいると思  
うほどに顔の筋肉が固すぎて表情が変わらない。割と普通なやつな  
のに無口と無表情という少し濃すぎる属性のせいで一種の凄みが出  
ている。それなのに割と場の空気が読めたり、お節介に近い気遣いを  
するため、なぜかテレパシーが使えるのではないかと噂になったりも  
している。

「こんにちは！」

ぺこり

「えっと予約していた. . .」

サツ

予約していた部屋の鍵とタオルとスポドリ

(何でこの人私が汗かいてるってわかったの!?!確かにハンカチで拭い  
て汗なくしたはずなのに!?)

こんな具合だ。しかし心の中では、

(いやーこの子急いでたんだね。制服で走ると汗籠るよね。わかるわ  
かる。少しいつもより体温が高そうだし、僅かに上気した頬、汗は見  
たところないけどちゃんと拭かないとダメだぞ。あ、それと私の奢  
りでスポーツドリンクもつけておこう。いいね。青春してるね。私  
もこんな時代あったなく. . . . . なんか虚しくなってきた。よし今  
日はまりなさんと飲もう)

これほどギャップが酷い人間がいるだろうか？いや、いない。そして、何気に年が近い月島まりなと仲が良い。

〈まりな side〉

小暮 舞は、私と一緒にこの音楽スタジオ『CIRCLE』の創立当初から働いている。私はオーナーとして働いているが、彼女はアルバイトとして働いている。もう正社員として働いて欲しいぐらいだ。あまり音楽に関する知識は無いので、私が毎日少しずつ色々教えている。彼女は、最初まったくもって喋らず、面接の時に少し困ったが真剣な目を見て採用した。まあ、ぶっちゃけ人手足りなくてまったく働きたい人いなかったから採用した理由も7割ある。だけど年も近いからか、話しかけているうちに、領きや、仕草などで何となく読み取れるようになり、今では飲みに行くほどの仲だ。感情や言葉を表に出さないだけで割と色々反応してくれるので今も仲良く仕事を一緒に頑張っている。ん？どうしたの飲みに行きたい？まあ、仕事が終わったからね。

〈side out〉

月島まりなは、舞の言いたいことがわかる……………最早彼女の方がよほどテレパシーを使えると疑ってもいいと思う。そして酒はほどほどに。

(さてと、割と平日が暇なのはしょうがないかな？ここ学生向けだし。

来るとしても4時過ぎかな？まあ、あと2時間くらいか清掃でもしてよ)

今日も平和なCIRCLE。しかし今日からは少しだけ賑やかに  
なっていくだろう。そんなこと予見できるはずない店員は、

(あゝさゝ目が覚めてゝまあっすぐに思い浮かぶきゝみゝのゝことゝ)

呑気にメルトを歌っていた。

そして、

「ありさゝ早く、早く！」

「だあー！そんなに急がなくてもCIRCLEは逃げねーって！」

ついにその時が、

(ピンクのすかあと、お気に入りの髪かゝざり、そしてえでかけゝよ  
う)

来た。

「こんにちはー！ギター弾きに来ました！」  
「おい！香澄！いきなり大声出すなって！」

ここから、大ガールズバンド時代の幕が上がる。

（わぁーお。元気だね〜隣の子息すごい切らしてる。取り敢えずタオ  
ルとスポドリ。猫耳の子には鎮静剤とかいるかな。え？何まりな  
？え？鎮静剤はいらない？そっか〜あれ？何で私鎮静剤なんて持つ  
てるんだっけ？まあ、いいや〜）

いつもと変わらないのテンションでいられるこの鋼を超える心臓と  
絶賛稼働中の強化顔面骨格。そして舞限定で発動するまりなの固有  
スキル、テレパシー。

「いや〜疲れたね〜ってうひゃ〜！」

「どうした香澄って!?!なんだ!?!」

（まずは、風邪ひかないように汗拭いて、飲み物渡して、猫耳につてこ  
れもしかして星じゃない？よくできてる〜。しかも弄つても崩れな  
い優れもの。それじゃあ、星の子に鎮静剤を……え？いらない？  
ええ〜でもこの子興奮し過ぎ……はいわかりました。打たないんで  
その能面の顔やめて！）

これは、大ガールズバンド時代を支えて行く物語。

(今日も終わった〜！飲み行こ！)  
(相変わらず元気だなく舞は、結構力仕事してるはずなのに。私こんな  
に体力なかったっけ?)

今日も小暮 舞は平和である。